

芝生の空襲

「芝生実行組合史」から引用・編集（文責：大森正美）

昭和 20 年の高槻市芝生地区は、三島鴨神社から北へ 3 km、120 軒ほどの長閑(のどか)な農村地帯だった。

6 月に入って 13 回、延べ 18 時間余りの空襲警報に、村人達は心身共に疲れ切っていた。

6 月 15 日、田植も近づき麦の取入れも急がねばならないのに朝から小雨が降りたり止んだりの空模様。「今日の段取りはどうするか」そんな思案をかき消すように、またもや防空情報を告げるラジオのブザーの音がした。

「中部防空情報、近畿地区 空襲警報発令、B29 の編隊らしきものが熊野灘を北進中でありませう。本日は大挙来襲の恐れがありますから警戒を厳重にして下さい」と、いきなりの空襲警報に敵機は近いと、慌てて防空壕へ飛び込んだ。



空襲警報が発令されてからもう 2 時間も経とうというのに、

飛行機の爆音も爆弾の炸裂音も聞こえず防空壕から出て、低く垂れこめた雨雲を見上げていた時、

またまた 11 時ごろ、ブーという音、「中部防空情報、敵機 B29 の編隊は大阪市の上空を東北へ進行中でありませう」というラジオの音が終わらぬ間に、腹に響くような爆音が近づいてきた。敵機は頭の上に迫ってきたので慌てて防空壕へと飛び込み、頭から布団をかぶって息を殺していた。

その沈黙を破るように突如として起きる炸裂、続いて板の間に豆を撒くようなザーという異様な音、その音はまさしく焼夷弾の降りそそぐ落下音であった。

雨雲の上からの B29 の爆音が北東の彼方に遠ざかった頃。

芝生の西の町に焼夷弾が落ちて、「火事や火事や」と叫びながらバケツを持って走る

人、警防団員はガソリンポンプを引いて走った。新池(芝生水路・農協前)を水源にしてポンプはうなりをあげ、ポンプに一番近い松政捨吉さん宅へ放水をはじめた。

西の町の家々はことごとく紅蓮(ぐれん)の炎に包まれている。防空訓練でバケツリレーの練習をしていたが、無数の物量にまかして一度に集中してバラまかれた多数の焼夷弾の前にはなすすべがなかった。

松政さんの家は半焼に食い止めることが出来たが、燃え盛る西の町へホースを移動する時、頼みとするたった一台のポンプが故障してしまった。必死で修理をしているがなかなか直らない。



芝生へ向かっていた高槻市の消防車も、途中で西冠の消火に回ってしまった。焼夷弾の燃えたゼリー状の油脂がわら葺き屋根に着火し、火勢は狂ったように燃え上り、家々の棟は無惨にも次つぎと落ち、地獄絵さながらの火の海であった。

家を焼かれた樋口末吉さん方では、娘の光乃さんが防空壕の中で 30cm の土盛りを突き抜けた焼夷弾が頭のとっぺんに当り即死し、空襲の尊い犠牲になられた。高槻国民学校高等科を 3 月に卒業したばかりの 15 歳であった。光永寺へ運ばれる時、若い御霊を悲しみ慰めるように小雨がしとしとと降り、警戒警報解除を知らずサイレンの音がひとしを物悲しかった。

大原定次郎・松政四郎・吉田捨吉・古口和市・大原次郎・森実晴夫・仲谷スエ・仲谷伊三郎・樋口末吉・橋本作次郎の 10 戸が全焼、松政捨吉が半焼というという大きな被害をうけた。

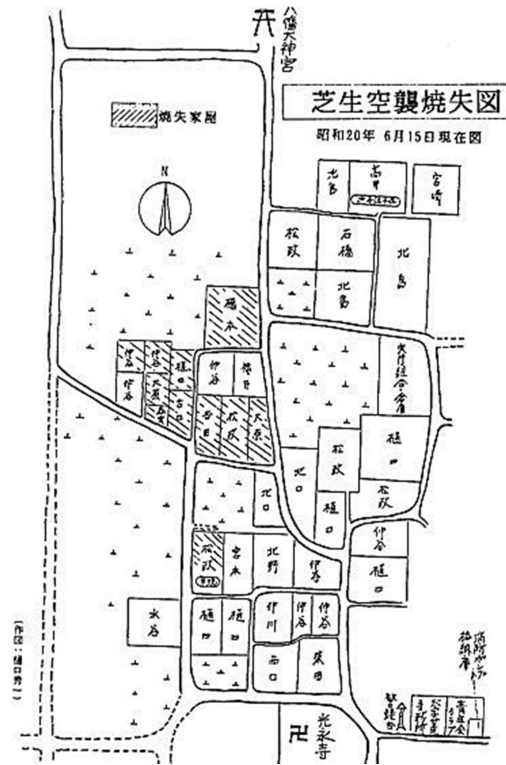
芝生の 11 戸の罹災者は瞬時にして家財や農具はおろか明日からの米も茶わんも一本の箸もない生活となった。寝るところもなく親戚に身を寄せる暮らしが続き、バラック小屋が建ったのは秋風の立つ頃だった。盲爆による焼夷弾は、現在の富田植木団

地辺りから落ちはじめ、高槻市立総合体育館・芝生小学校から芝生の西の町をかすり、そして芥川を越えて帯状に北東に延び、西冠に達していた。このとき西冠で1戸が罹災している。

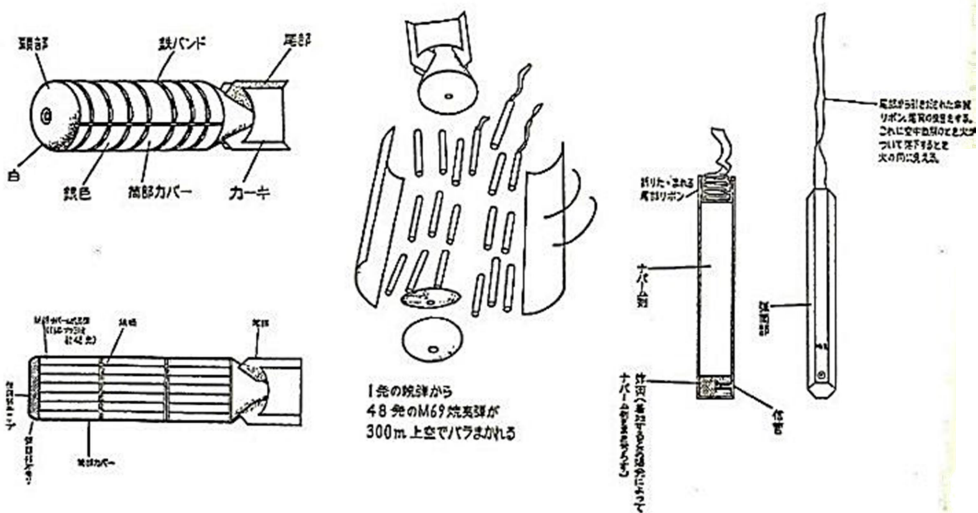
爆撃の被害は死者1名、重軽傷者2名、全焼10軒、半焼1軒、被災者約40名、牛1頭の焼死であった。

当時芝生町内会長であった松田長十郎氏は、「戦争といえば、空襲と即答するほど私にとって空襲は恐ろしいものとなり、胸の奥に沈まり、二度と戦争をしてはいけないと叫びたい」と語られている。

芝生実行組合史の編者は、「時の流れは早い、芝生の空襲の焦熱地獄を知る人も少なくなかった。この歴史的な大事件を記録して、後の世代に語り継がねばならない」と記されている。



M 6 9 集束焼夷弾分解図
(東京大空襲・戦災誌 第3巻から)



付記 平成9年発行の「芝生実行組合史」から引用・編集した
 <発行時の高槻市芝生実行組合長は吉田孝雄氏>